

○ 大図（福井県）

「自江戸歴尾州赴北国奥州沿海図 第十二（自蒲生／至橋立）」

国宝：地図・絵図類 番号26 縮尺1/36,000

大図の外側に「自蒲生 北 三尺一寸一分七厘
至橋立 東 二尺四寸」

と墨書され、大図の測線の末端同士的位置関係が記録されている。この墨書の通り蒲生浦を享和3年6月12日に
出立してから26日に橋立村に到着するまでの測量の成果であり、越前崎、三国湊、福井、吉崎、大聖寺などが描かれている。とりわけ目を引くのは大図中央の九頭竜川と東尋坊付近の断崖絶壁の迫力ある表現である。アメリカ大図では記載されていないが、国宝の大図には細字で「トウジンボウ」の文字が書き込まれている。

越前測量では次々と隊員が麻疹に倒れ、忠敬自身も三国湊で6月20日「病氣逗留」、21日「加養に逗留」となった。

会報第73号には石川県支部による大聖寺、吉崎、橋立の踏査報告があり、現状を知ることが出来る。



日本沿海輿地図 中部・近畿から大図の範囲 東京国立博物館

○ 大図 石川県南部（加賀市・小松市・白山市・金沢市）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第十三（自橋立／至宮腰）」

国宝：地図・絵図類 番号27 縮尺1/36,000

この大図は享和3年6月27日に橋立村を出立して、7月3日に金沢城下を出立するまでの測量成果である。安宅浦から加賀藩領に入ったが案内の村役人に村高や家数等を質問しても、「領主より指図なし」として答えようとしないう加賀測量が始まった。さて、国宝の大図は一見すると単調極まりない。日本海に沿って緩やかに弧を描く測線と「安宅」などの村名が続くだけである。よく見ると、日本海の浜辺、海岸砂丘列と林、背後の集落という絵画的表現はさすがである。

ところが、7月2日の宮越町から金沢城下までの測線は不自然なまでに直線である。さらに、この区間の村落の名前が一切記されておらず、これまた不自然である。また測量日記にはこの区間で「測量に量程車を用」とある。これらの謎については、河崎倫代会員の「伊能忠敬、金沢測量三日間の謎」（会報第68号）が解き明かしている。なお、会報第84号によると、金沢城下で宿泊地（住吉屋太兵衛）跡に石川県支部の手によって案内板パネルを設置したとのことである。アメリカ大図では金沢城下での宿泊町名の記載がないが、国宝大図では天測の合印とともに「尾張町」と記されている。



日本沿海輿地図 中部・近畿から大図の範囲 東京国立博物館蔵

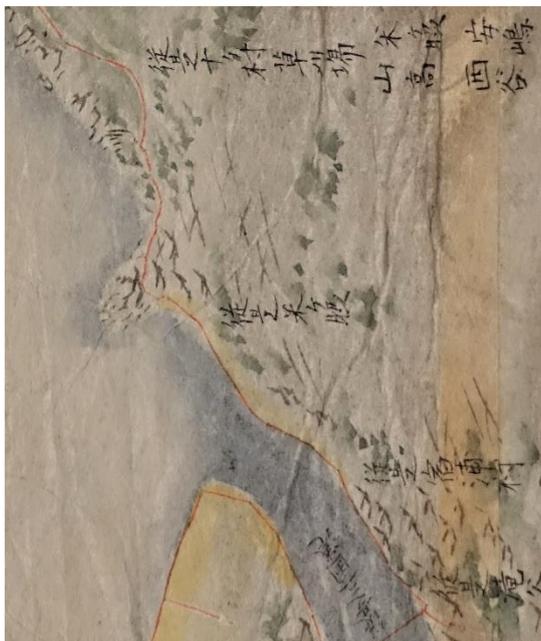
上記の大図3鋪は第1展示室に展示されており、従来通り撮影禁止である。今回の展示では、以下紹介する第2展示室に展示されている国宝については撮影が許可されている。三脚、自撮り棒やフラッシュを使わないことが条件である。展示ケース越しの撮影であるため、ライトや撮影者の影が映り込む事もあるが、有難いことである。なお、HPや会報に掲載する場合には、事前に掲載許可を申請する必要がある。

○ 大図（福井県）

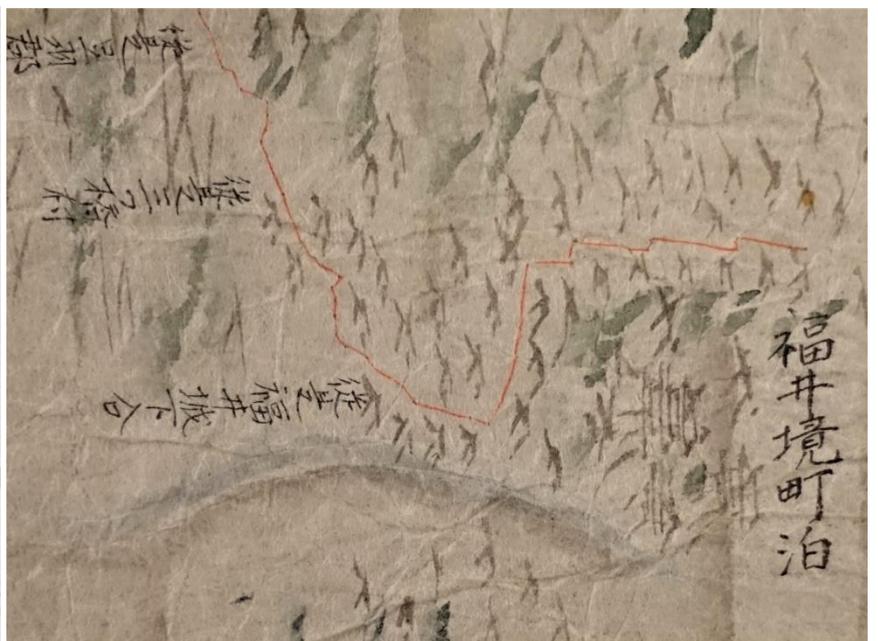
「自越前国丹生郡蒲生浦至加賀国江沼郡橋立村図」

国宝：地図・絵図類 番号102 縮尺1/36,000

第1展示室の地図・絵図類番号26の福井県の大図と同じ範囲の大図である。上呈図の伊能家控図である26番に較べると折目や皺が目立ち、コンパスローズや天測などの合印は省略され、試作品の観がある。裏面には「弐の下」「二ノ下」と二箇所到大書してある。多くの地名は「従是（これより）〇〇」と記され、宿泊先には「福井境町泊」のように「泊」の字を付している。うっすらとではあるが福井城も描かれている。また裏打ちがしてないようなので、針穴も確認出来る。



↑ 東尋坊



↑ 三国湊

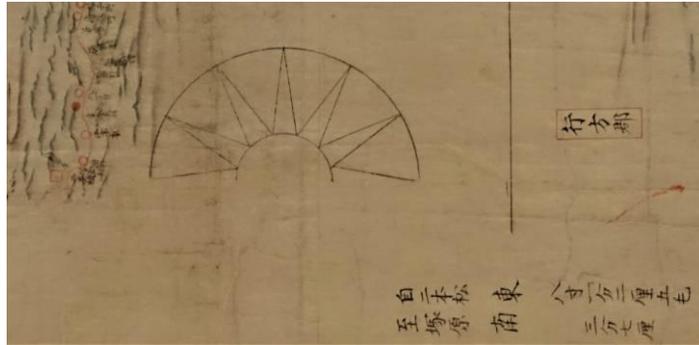
↑ 福井城下

○ 中図（東北地方）

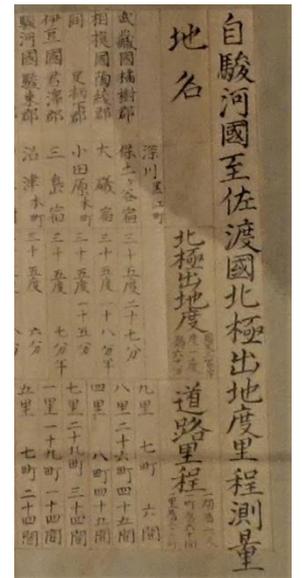
「陸奥・出羽沿海図」

国宝：地図・絵図類 番号 8、文化元年、縮尺216,000分の1、縦248.6×横216.2Cm

東北地方を描いた中図である。経線・緯線が引かれており、本初子午線（経度0度）を江戸としている。緯線には三十八度から四十一度までの数値が記されているが、経線に数値はない。左側の日本海の余白部に、北極出地度里程測量の一覧表を第1次・第2次測量分、第3次測量分、第4次測量分と3段に分けて載せているが、凡例はない。コンパスローズは枠だけで彩色されていない。文化元年上呈中図の伊能家控図の試作品であろうか。



↑ コンパスローズ



↑ 北極出地度里程測量

○ 麓絵図（三島～御殿場）

「自伊豆国君沢郡三嶋宿至駿河国駿東郡深山村麓絵図」

国宝：地図・絵図類 番号 561 縦 23.9×横 47.8Cm

第9次測量の伊豆七島測量を無事に終え熱海で一ヶ月滞留した後、測量隊は江戸周辺の諸街道の間を繋ぐ測量を始めた。文化13年1月28日に三島宿を出立して「甲州街道へ向て御殿場村迄の道筋測量」を開始し、佐野村まで進んだ。29日からは佐野村の追分を左折し、須山道を進み深山村を経て「富士山登口南口」まで測量した。一旦佐野村に戻って御殿場へ向かい、2月3日には御殿場で文化8年12月4日の旧測に繋いだ（麓絵図に古測御殿場とある）。2月5日からは印野村を経て富士の裾野を西に向かった。ところで、この麓絵図の資料名には「至駿河国駿東郡深山村」とあるが、深山村は描かれていない。描かれているのは三島から御殿場まで、佐野村から今里村まで、御殿場から印野村までである。

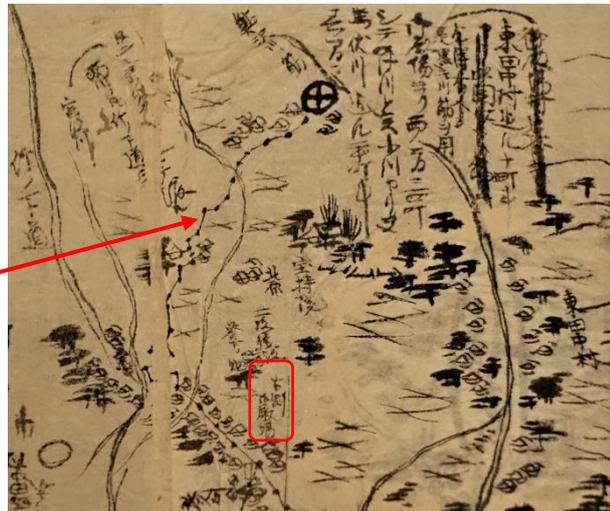


国会図書館大図 100・101号より作成

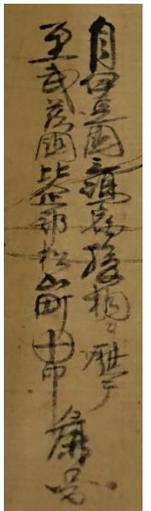
国会図書館デジタルコレクション



↑ 佐野村「左須山道追分」



↑ 古測 御殿場



↑ 裏面

この匱絵図の右端には裏面の文字が裏写りしているので写真を反転してみた。

「自伊豆国三島宿駿相ヲ歴テ 至武蔵国比企郡松山町⊕印 匱図」と記されており、国宝の資料名とは異なる。比企郡松山町は現在の埼玉県東松山市であり、この匱絵図の範囲から遠く離れている。三島宿より、駿[河]、相[模]を歴て武蔵国の松山町に至るとあるので、この後の富士南麓測量、東海道の平塚から北上を始め、厚木で大山街道と、八王子で甲州街道と、川越・松山を経て熊谷で中山道と測線を繋ぐ測量の匱絵図の全体のタイトルにふさわしい。第9次測量の匱絵図のうち、展示中の匱絵図や、国宝地図・絵図類番号555の「自武蔵国比企郡松山町至武蔵国比企郡井草宿外匱絵図」や、560「自伊豆国賀茂郡古佐美村至伊豆国君沢郡三嶋宿匱絵図」だけが残存しているということであろうか。

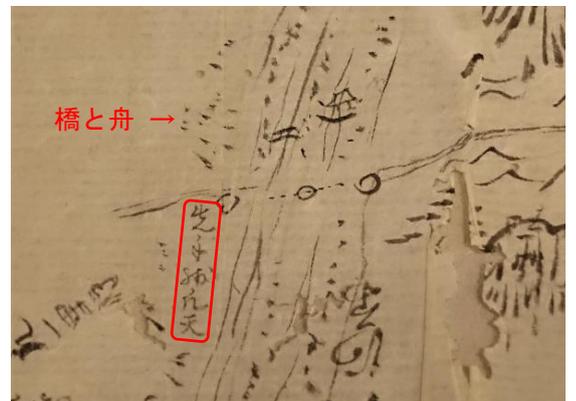
他の匱絵図に較べると、測線と思われる線  が書き込まれ測量日記の測量路の記述と一致すること、画面全体に細密な風景描写がなされていること、沢山の文字情報が書き加えられていることなどに特色があり、下図のような役割も果たしたのではないだろうか。

作者については門谷清次郎かと推測される。門谷は第5次測量には忠敬の内弟子として、第8次、9次測量には高橋景保の手付下役として参加していた。文化4年1月21日付の高橋景保が忠敬に宛てた書状（『埼玉大学紀要17』、『天文曆学諸家書簡集』所収。会報75号で渡辺一郎氏が紹介）に画工の代わりに門弟の清次郎を貸して欲しいとあるので、青木勝次郎と同様に絵画の才能があったのであろう。大谷亮吉『伊能忠敬』や会報8号の伊能陽子氏の「封廻状」によると、門谷清次郎(常久)は幕府の御細工所同心組頭の門谷八郎右衛門の子で、後にシーボルト事件に連座して江戸十里四方追放となった。

○ 匱絵図（中山道：埼玉県本庄市～群馬県高崎市）

「武蔵国児玉郡本庄至上野国緑野郡小林村匱絵図」 国宝：地図・絵図類 番号566

この匱絵図の描画範囲の測量路は本庄から勅使河原村の先の神流川の渡し場までであって、本庄～小林村の風景ではない。匱絵図には風景だけでなく、各村の領主名も記され情報が豊富である。勅使河原村の先の神流川には舟と渡し場が描かれ、その先には中洲との間には橋がかかっている。また、川の兩岸と中洲に○印があり、「先手残梵天」とかかっている。これが制作年代を推定する手がかりとなる。測量隊が勅使河原村で神流川を渡河したのは3回で、第三次測量の帰路の享和2年10月17日、第四次測量の帰路の享和3年10月5日、第七次測量の往路の文化6年9月10日である。そのうち第七次測量だけが先手、後手に手分けして測量をしている。先手の伊能隊は日の出前の暁七ツ半に出発し、先に神流川を渡り郡界から倉賀野まで測量した。後手の坂部隊は日の出の六ツ後に出発して本庄から郡界までを測量した。先に渡河した先手は後手の便宜をはかって神流川の梵天を残しておいたのであろう。先手の隊員には絵の得意な青木勝次郎が加わっているので、この匱絵図の作者と考えてよい。



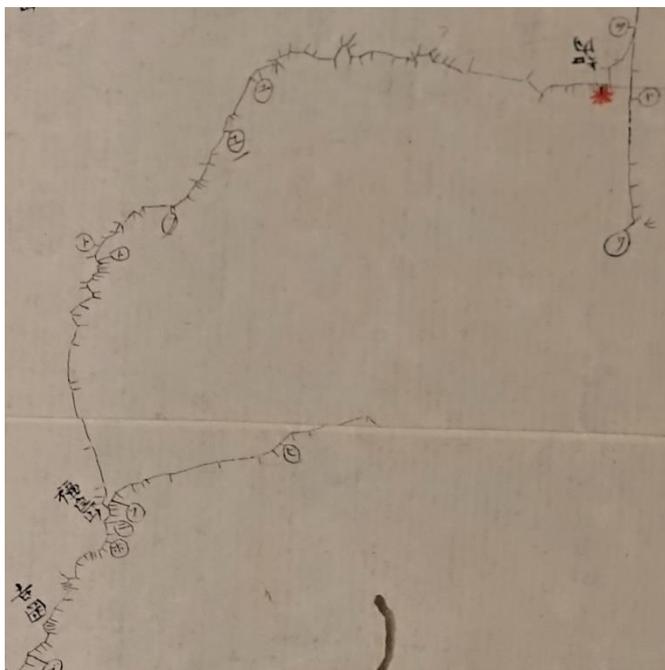
○ 広域下図（北海道 松前～吉岡～函館～森町）

「自松前至ナカノカワ川下図」 国宝：地図・絵図類 番号246 92.4×63.4Cm

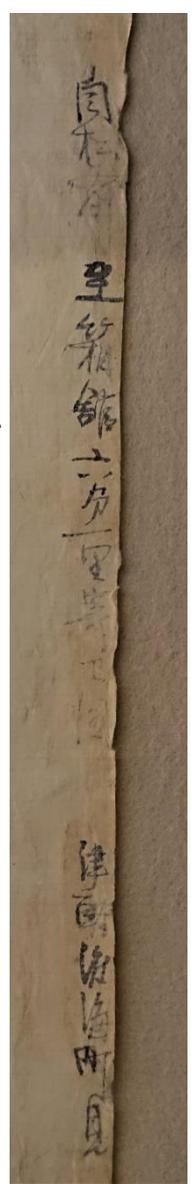
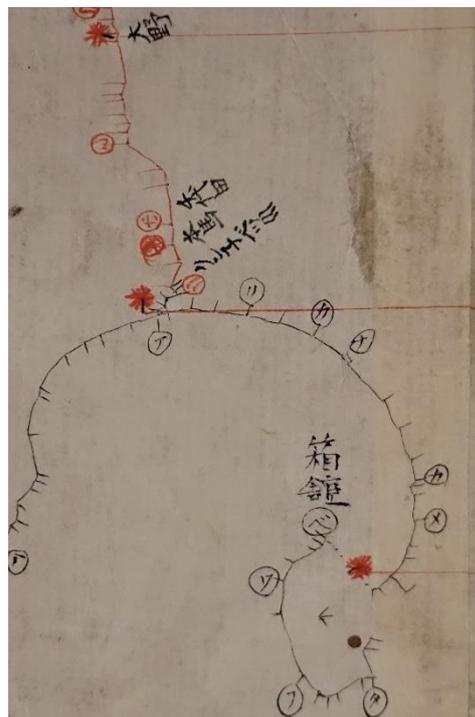
この下図にも用紙の端に裏面の文字が裏写りしているので写真を反転してみた(右図)。

「自松前至箱館 六分一里 寄セ図 津軽附海町見」とあるので、縮尺 1/216,000 の中図作成のための寄図である。但し、『伊能忠敬関係資料目録 下図』（伊能忠敬記念館 2005）によるとこの下図の実際の縮尺は約 1/170,000 で「六分一里」とは一致しないとのことである。この範囲の下図に「自クネベツ川至ノマシシリ川下図」（国宝地図・絵図類 247）、「自トウヅリ至箱館下図」（同 248）、「自松前至木古内下図」（同 249）がある。この3鋪の下図を縮小して集成したものでしょうか。このような縮小寄図をさらに集めて中図がつけられた。

この下図は、第1次測量で寛政12年5月19日に吉岡に上陸してから、箱館を経て、6月1日に内浦湾近くまでの測量と、ニシベツからの帰路の9月10日から18日に松前の弁天前山まで測量して乗船出帆するまでの成果である。測量日記には記載がないがこの下図を見ると福島から海岸線を測量して途中で断念している。また帰路にも知内から海岸線測量を試みている。アメリカ大図にも同様に途中で途切れた測線が描かれている。



↑吉岡 ↑福島 ↑知内

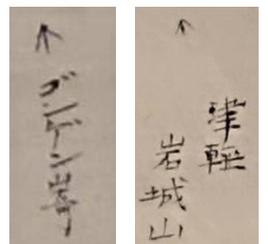
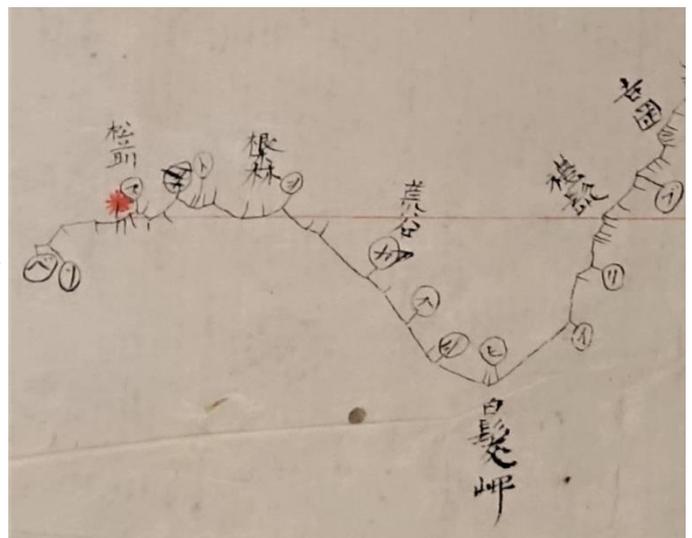


知内、箱館、大野などの赤い印は何だろうか。天測の合印の原形であろうか。ただし測量日記の天測記事と一致しない場所もあるようである。

右の吉岡から松前までの部分について測量日記では「九月十七日福島立。昼食アラヤ、道法五里、松前城下、八ツ半頃に着…福島より一里程行吉岡、それより半里程行吉岡峠〔白神峠と云う 海岸白カミ岬也〕大峠なり」とあり、内陸の峠越えのように読めるが、下図には白髪岬に測線が記されている。

「九月十八日…弁天の前山に登て大嶋小嶋その外測量。午中より風宜に付乗船出帆。」とあるように、右の下図の松前の西の㊦が弁天前山であろう。

下図の南側1/3には測線がない。ミュージアムグラスでよく見ると矢印と微細な文字で「ゴンゲン崎」「津軽岩城山」などが見えた。裏面の墨書のなかに「自松前至箱館 六分一里 寄セ図」に加えて「津軽附海町見」とあるのは、この弁天前山からの津軽海峡方面を遠測した成果を描いたことを示すものであろうか。

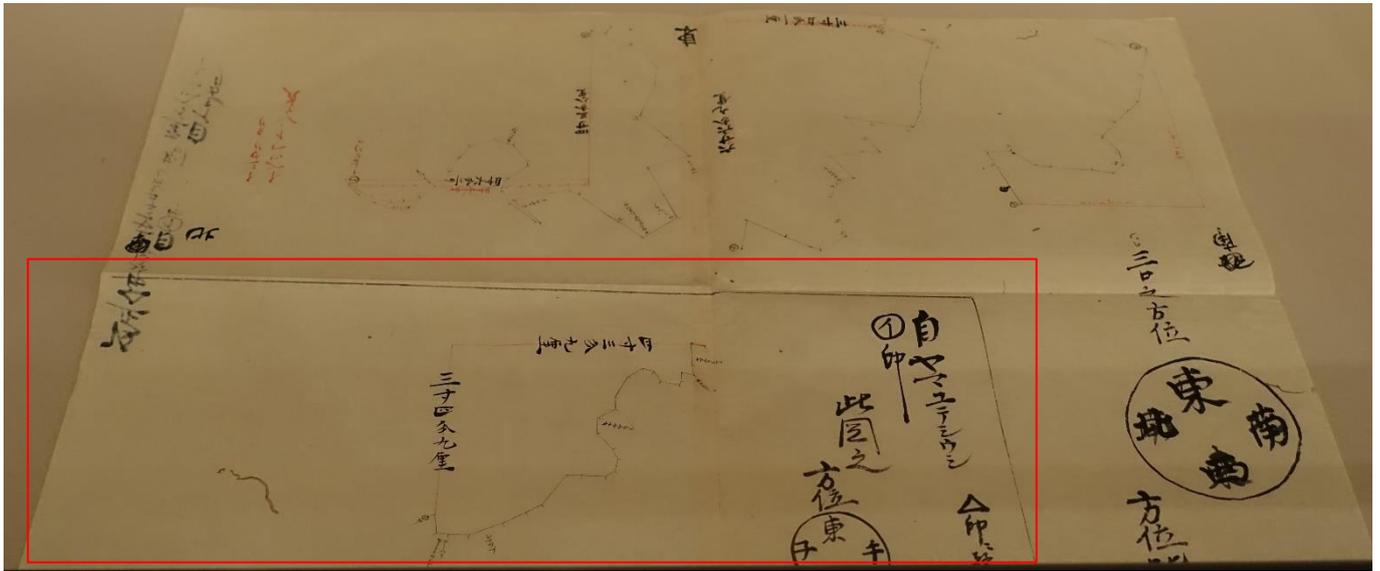


○ 小区域下图（北海道石狩川河口）

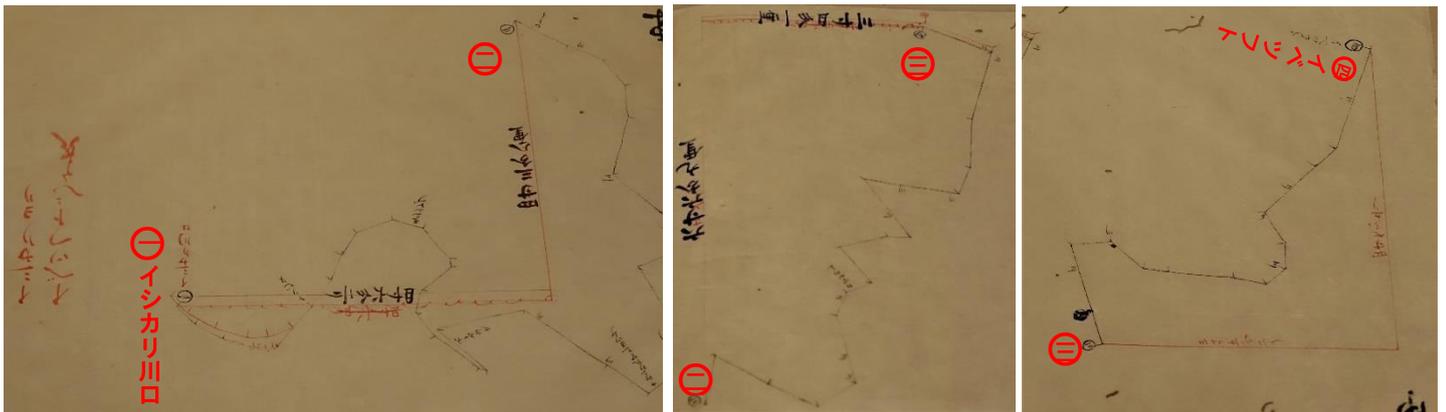
「自イシカリ川口至イベツフト・自セイトイウシナイ至ヤマユテミウシ下图」

国宝：地図・絵図類 番号130 縮尺36,000分の1 63.5××46.2Cm

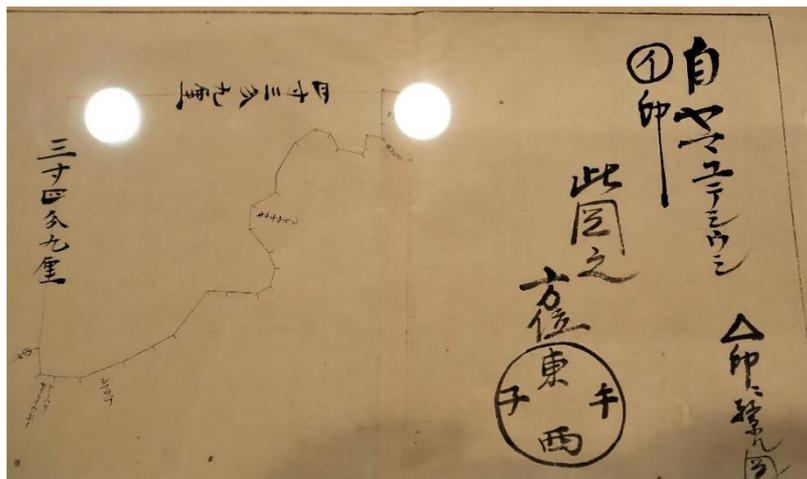
裏面の文字が裏写りしているので写真を反転してみると、「改正 △印ニ繋図 自①印 至ヤマテユシウシ 別口 自イシカリ イベツフト」と記され、1枚の用紙に左下の部分と上部に2つの図が製図されている。



上部の図「イシカリヨリ イベツフトニいたる」も次のように㊶～㊸、㊶～㊷、㊷～㊸に3分割されており、㊶㊷で接続することが出来る。同じ範囲のアメリカ大図を参考に並べてみた。



下部の図「自ヤマユテシウシ ①印 △ニ繋ぐる図」については、
 国宝の資料名は「ヤマユテミウシ」
 裏面の表題では「ヤマテユシウシ」
 図中の表記では「ヤマユテシウシ」と微妙に異なる。また、伊能図大全の地名索引にも見当たらず場所の特定が出来ていない。



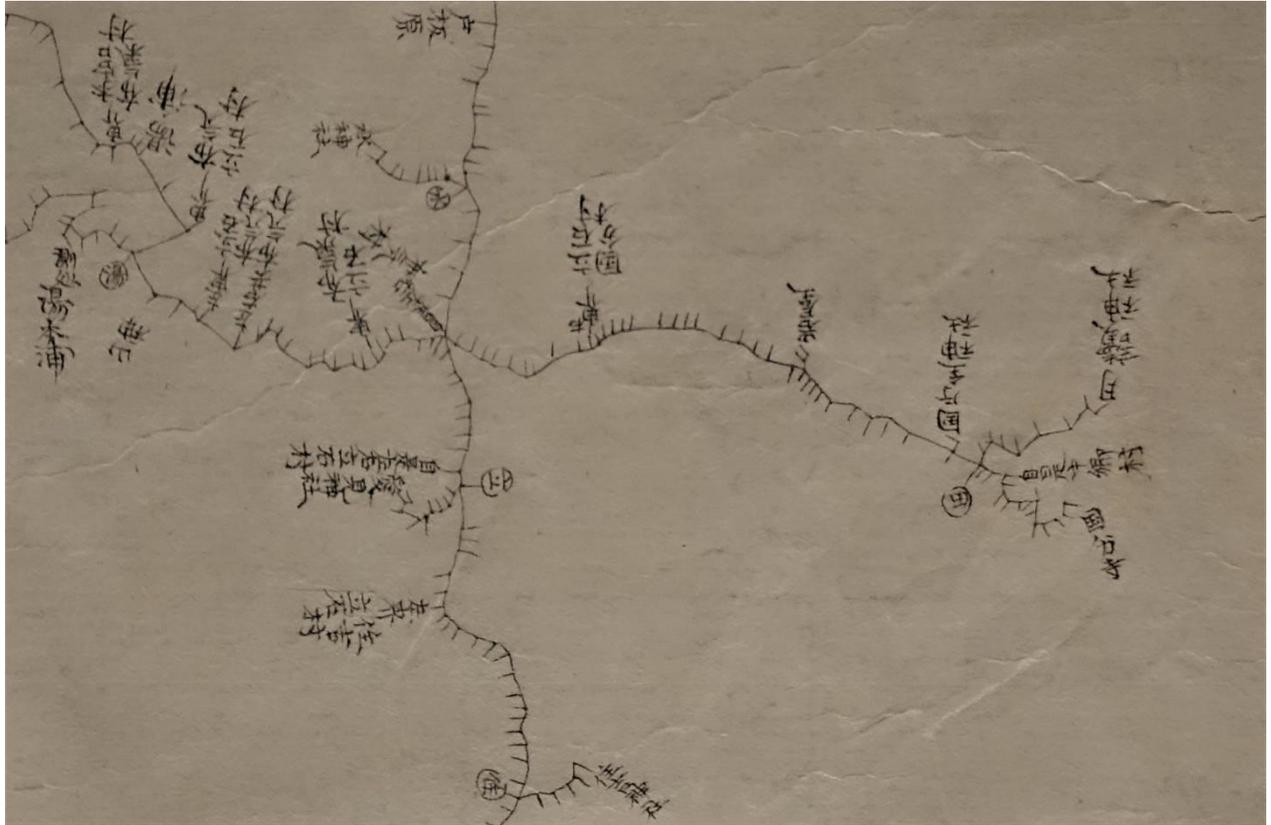
アメリカ大図 18号に加筆

○ 広域下図（長崎県壱岐島）

「壱岐国下図」

国宝：地図・絵図類 番号360 縮尺36,000分の1 82.9×94.3Cm

壱岐島測量は文化10年3月13日から27日までである。この下図を見ていると、これまでに無く沢山の神社が記載されており、街道などからわざわざ測線を延ばしている。3月22日付で坂部貞兵衛が忠敬に送った書状が会報9号13ページに紹介されている。伊能本隊と坂部支隊の測量ルートを調整する中に「式内社が三座もあるから是非測るべき街道です」とある。五島列島や対馬測量でもこれほどに神社を記載してはいない。壱岐島測量における神社の扱いは謎である。



『壱岐国之図』（京都大学附属図書館所蔵）から下図と同じ部分